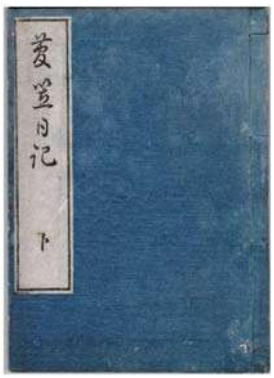
随筆

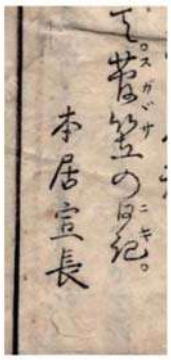
『菅笠日記』収集での事

飯　田　良　樹（久居一志地区）

十数年前に町村合併があり、一志町八太の歴史を残そうとなった。八太の中心を通っている道が、六軒から青山を超えて長谷寺（初瀬）までの初瀬街道と初めて知った。初瀬街道を通った旅行記を調べていたら、明和９(1772)年の桜の季節、松阪の本居宣長が青山越えで吉野の桜見物に出かけた様子を、寛政７(1795)年夏に旅行記として出版したのが『菅笠日記』であるとわかった。

「さて三渡りより二里といふに八太（ハタ）といふ驛（ウマヤ）あり。八太（ハタ）川、これも板橋也。雨なほやまず。」と乗り継ぎ馬を用意する駅と八太川（注：波瀬川）にかかっていた橋が板橋と、我が先祖の八太の事が書かれていた。





『菅笠日記』は上下巻あり、題簽（だいせん）は上巻「須我笠の日記」、下巻は「菅笠日記」で下巻最後に「よしや匂ひのとまらずとも、後しのばん形見にもその名をだにと、せめてかきとゞめて菅笠（スガゞサ）の日記（ニキ）　本居宣長」。菅笠日記に「スガゞサ　ニキ」とルビが振られている。上巻題簽の「須我」は和歌発祥の須我神社からの当て字と思われる。

桜見物の吉野までの往路は青山越えの初瀬街道、帰路は榛原から伊勢本街道で松阪へ帰っている。

以降、古書店やヤフオクで『菅笠日記』をみると買い求めて５冊となった。この５冊の違いは何かとみると、版本なので同じ字体で本文は摺られているが、奥付の版元が違う事に気付いた。

『菅笠日記』の版元を調べるために本居宣長記念館を訪れた。丁度、今NHKで蔦屋重三郎の事を題材に『べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～』が始まり、吉原の本屋から本を出す版元になる経緯が放映さ

れている。職員の方に、蔦屋重三郎が寛政７(1795)年３月25日に本居宣長を訪問したと『雅事要案』に書かれており、その後『玉勝間』『手まくら』『出雲国造神寿後釈』が蔦屋重三郎から出版されたと教えて貰ったが、残念ながら『菅笠日記』は蔦屋重三郎からは出版されていなかった。また、「菅笠日記の出版までは、明和９(1772)年、５月７日付けの谷川士清書簡に吉野山旅日記を借用希望することや、７月付けの士清書簡に借用の礼と感想が記されていることから、帰宅後まもなく執筆されたと考えられ、刊行は寛政７(1795)年で、それまでは写本で流布した」と教えて頂いた。本居宣長記念館に収納されている『菅笠日記』の版本が書かれている『中野本・宣長本刊記集成』日下幸男編、『鈴屋学会報 第21号』「宣長版本における版権の流れ」万波寿子、『宣長の版本』吉田悦之のコピーを頂いた。

頂いた３冊の本の中に出てくる『菅笠日記』の奥付記載と国会図書館デジタルアーカイブ、私の収集した５冊の奥付を表にした。

菅笠日記の版本

発行書林	住所	刊行年	
勢州書林　柏屋兵助 京都書林　銭屋利兵衛	松阪日野町 寺町通佛光寺ドル町	寛政七年乙卯夏発行	本居宣長記念館 **著者蔵**
発行書林　柏屋兵助 銭屋利兵衛	勢州松阪日野町 京都寺町通四条上ル町	寛政十一年己未初秋	**著者蔵**
弘所江戸　須原茂兵衛 京都　銭屋利兵衛 伊勢松阪　柏屋兵助	日本橋通壹丁目 寺町通四条上ル町 日野町	?	本居宣長記念館 **下巻のみ著者蔵**
江戸　岡田屋嘉七 大阪　河内屋茂兵衛 河内屋藤兵衛 伊丹屋善兵衛 伊勢松阪　柏屋兵助 京都　東屋治助 山城屋佐兵衛 田中屋藤助 菱屋孫兵衛	記載なし	?	国立国会図書館 デジタルアーカイブ
発行書林　須原屋茂兵衛 須原屋伊八 山城屋佐兵衛 和泉屋 岡田屋嘉七 出雲寺文治郎 紙屋惣右衛門 榎並屋小兵衛 近江屋平助 伊丹屋善兵衛	江戸日本橋通壹丁目 同　浅草茅町二丁目 同　日本橋通二丁目 同　両国橋山町三丁目 同　芝神明前 京都二条通升屋前 肥前佐賀白山町 大阪南久宝寺 同　心斎橋筋後町 同　心斎橋南久宝寺町	?	国書データベース 本居宣長記念館 （須原屋伊八から近江屋平助までは省略されている） **下巻のみ著者蔵**
書肆　岡田屋嘉七 河内屋喜兵衛 河内屋和助 敦賀屋久兵衛 同　彦七 同　義助 菱屋孫兵衛	江戸芝神明前 大阪心斎橋北久太郎町 同　心斎橋安土町 同　心斎橋南詰 同　心斎橋安楽寺町 同　心斎橋 京　御幸町御池南	?	本居宣長記念館
帝都　銭屋惣四郎	寺町通本能寺前	?	竹苞蔵板　**著者蔵**
阪府書林　前川善兵衛	大阪東区南久宝寺町４丁目６番地	?	文栄堂蔵板 大阪市立大学譜族図書館森文庫蔵本

寛政７年に発行本（寛政七年本）は、松阪魚町居住宣長の版本を専門に出版している松阪日野町「柏屋兵助」と協同発行書林の京都寺町通仏光寺下ル町「銭屋利兵衛」である。

寛政11年に発行本（**寛政十一年本**）は「柏屋兵助」と「銭屋利兵衛」となっているが、「銭屋利兵衛」は住所が移転したのか京都寺町通四条上ル町となっている。

後の６冊は発行年が不明であった。

寛政十一年本に、江戸日本橋通壹丁目の「須原茂兵衛」が加わり、「柏屋兵助・銭屋利兵衛・須原茂兵衛」が発行した「**三弘所本**」。

「柏屋兵助」が中心となり江戸・大坂・京都の販売元が加わった「**柏屋本**」。

今まで中心となっていた「柏屋兵助」が版権を売却したのか販売元より消え、江戸「須原屋茂兵衛」が中心となり江戸・京都・大阪に加え、肥前佐賀までも販売元を拡張した「**須原屋本**」。

その後は、「柏屋兵助」「須原茂兵衛」も抜けて「須原屋本」に出てくる江戸「岡田屋嘉七」を中心とした大阪、京都の販売元となる「**岡田屋本**」。

最後の２冊は他の協同販売者がなく、京都 竹苞書楼銭屋惣四郎が発行した「**竹苞書楼本**」と大阪 文栄堂前川善兵衛「**文栄堂本**」である。

立命館大学の「現代に伝わる版木展」によると、

竹苞書楼こと佐々木惣四郎（銭屋惣四郎とも）は、寛延４（1751）年の創業である。現在も寺町姉小路で古書籍商として営業を続けているが、その店舗は元治元（1864）年の蛤御門の変で焼失した際に建て直されたもので、その古い佇まいは有名である。竹苞書楼旧蔵の板木約2500枚は、平成16（2004）年に永井一彰氏が調査に着手され、平成17（2005）年に奈良大学博物館に譲渡された。

（https://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/GCOE/2012/hangi/cat820/cat814/）

「**文栄堂本**」については、もう少し調査の必要がある。

ここまで書き終わった時に、再度『菅笠日記』を検索したら、『古典籍総合データーベース』に99篇の菅笠日記が番号を振って掲載されていた。

詳しく検討すると、第89と第90は同じ菅笠日記を上巻と下巻に分けていたので、収集は98篇となる。また『中野本・宣長本刊記集成』に掲載されている**文栄堂本**が大阪市立大学収蔵となっているが、古典籍総合データーベースでは、大阪市立大学と大阪府立大学は2022年４月に統合されて大阪公立大学となったので、大阪公立大学収蔵となっている。第94は国文学研究資料館（国文研）所蔵の尾陽書肆　永楽屋東四郎　名古屋本町通七丁目（「**永楽堂本**」）が掲載。

では、98篇の内訳は、

・写本　21篇
・版本（刊）77篇　明和９年本　９篇
　寛政７年本　12篇
　寛政11年本　20篇
　三弘所本　７篇
　柏屋本　２篇
　須原屋本　７篇
　岡田屋本　３篇
　竹苞書楼本　１篇
　文栄堂本　１篇
　永楽堂本　１篇
・発行所記載不十分の為に分類不明版本　14篇

（「**明和九年本**」の記載であるが、デジタル表示の奥付がないので版本として柏屋兵助が単独に出版したか、所蔵書の確認が必要である。）

以上のように分類できた。

ここで、京都「**竹苞書楼本**」、大阪「**文栄堂本**」、名古屋「**永楽堂本**」は各々の版元が版権を持ち版本を出している。

「宣長版本における版権の流れ」に記載されている宣長版本の版権の移動を、万波寿子は３つに分類している。

１．伊勢・京都で出版されて後に版権が大阪書林に移動したもの
２．尾張の永楽堂や風月堂が中心となり、三都の書林と提携出版したもの
３．鈴屋蔵板で出され、部分的に永楽屋に版権が移ったもの

『菅笠日記』については、この３分類には収まらない京都の竹苞書楼（銭屋惣四郎）が版権と版木を買い求めて現代に至っている**竹苞書楼本**を、『菅笠日記』版権の移動についての第４の分類として考えてもよいのではと思う。

追記

立命館大の「版木をめぐる研究集会」で宣長本の版権移行が書かれているのがわかった。

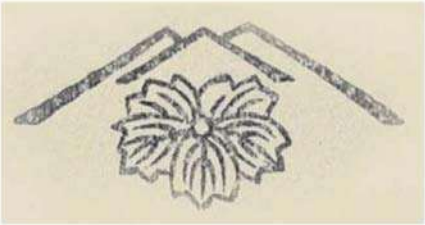
文政12年（1829）２月に京都の本屋・銭屋利兵衛から蓍屋（めとぎや）勘兵衛に、宣長の著作ばかり十点（『字音仮字用格』『国号考』『漢字三音考』『玉あられ』『玉鉾百首』『玉鉾百首解』『**菅笠日記**』『神代紀髻華山蔭』『真暦考』『大祓詞後釈』）、板木78枚が銀四貫五百匁（およそ金七十五両）で売り渡された。これらは伊勢の柏屋兵助と京都の銭屋利兵衛の相合の関係で出されたものだった。その銭屋の持ち分（大半は２分の１）が蓍屋に売られた。ところが蓍屋は翌文政13年10月にはそっくり山城屋佐兵衛（文政堂）ら六軒の本屋に六貫五百匁で転売した。文政堂らは「本居講」のようにして六軒で持ち合った。半株を６等分するので、個々の店は全体の12分の１ずつの相合株を所有したことになる。
（六軒とは山城屋佐兵衛、橘屋嘉助、伊勢屋喜右衛門、石見屋九兵衛、河南儀兵衛、河南宗助）

なお、『古典籍総合データーベース』第90の国会図書館所蔵には柏屋兵助以下山城屋佐兵衛（京三条通麩屋町東角）、橘屋嘉助（京寺町通姉小路上ル丁）、伊勢屋喜右衛門（京烏丸通姉小路上ル丁）、石見屋九兵衛（京三条通富小路西へ入）、河南儀兵衛（京三条寺町東へ入）、河南宗助（京寺町通三条上ル）が挙げられている（「**柏屋本**」に分類した１篇）。

また、銭屋利兵衛（華箋堂）については、宝暦ころから仏書・漢籍など幅広く販売してきた店。安永３年頃寺町通錦小路上ル、寛政８年は寺町通仏光寺下、寛政10年本に寺町通四条上ル、寛政11年は柳馬場東入ル、後に富小路西入北川と移転が多いと掲載されている。

まだまだ、調べている途中ではあるが、蔦屋重三郎の事を題材にしたNHK大河ドラマ『べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～』を見て、『菅笠日記』の版権の流れを私なりに分類して書いた。

蔦屋重三郎（耕書堂）の版画



蔦屋を示す「富士山形に蔦の葉」

東洲斎写楽

市川鰕蔵の竹村定之進

二世小佐川常世の竹村定之進妻桜木

瀬川富三郎の大岸蔵人妻やどり木と
中村万世の腰元若草図

二世市川高麗蔵の忠兵衛と中山富三郎の梅川

（所蔵している東洲斎写楽の版画だが値段と紙質・色合いより再版浮世絵か？）